

平成 22 年 5 月 1 日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2007～2009

課題番号：19611018

研究課題名（和文）博学連携による小中学校における地域地学資料展示の取組と子どもの変容
 研究課題名（英文）The regional based exhibition efforts in collaboration with schools and museum for the transformation of the child.

研究代表者

田口 公則（TAGUCHI KIMINORI）

神奈川県立生命の星・地球博物館・企画情報部・主任学芸員

研究者番号：70300960

研究成果の概要：学校では様々な形での展示活動が行われている。博物館と連携し、新たな情報発信の環境となる「学校ミュージアム」を小学校・中学校にて実践した。学校ミュージアムという形で、学校活動に博物館活動を取り入れることが可能である。

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007 年度	1,500,000	450,000	1,950,000
2008 年度	900,000	270,000	1,170,000
2009 年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	3,100,000	930,000	4,030,000

研究分野：博物館教育

科研費の分科・細目：博物館学

キーワード：博物館学、展示学、博学連携

1. 研究開始当初の背景

理科室と入った教室にて標本展示を行い、子どもたちと実物標本の接点を築く環境作りを行っている学校は多い。野外学習の実践が理想であるが、様々な制約により学校現場では野外学習活動を容易に推進できる状況ではない。そこで学校内での学習環境作りが注目されている。例えば、校庭での自然観察、ピオトープの設置、古くは岩石園の実践等々である。また、博物館が学校と連携して、学校での博物館活動とよべる展示活動を行うとすれば、より広い活動が展開できる。博物館の展示手法を活かし、地域に普通に見られる資料を展示によって演出することは、身近

な自然の再認識、ひいては野外学習への誘いにつながることを期待できるだろう。

教室へのミニ展示作りは、学校教員そして子どもたちが博物館機能（収集・保管・展示）を理解する機会を供する（田口, 2002; 尾崎, 2001）。博物館における諸活動が、学校教育においても学習の対象となることを知る機会といえる。

2. 研究の目的

本研究の目標は、地学資料をはじめとする実物標本の展示実践を通じて「子どもや教師が、モノと接するときに、日常的にモノを展示し触れさせることで、何らかの学習が促進

されるか」を知ることである。理科室をはじめとする学校の日常空間にて、どのような展示が行えるのか、そして展示は子どもや教師にどのような変容をもたらすのか。また展示実践により、児童・生徒が、様々な事象と出会って知らせてきたとき、大人(教師)がそれを取り上げて褒め、新しい情報や今までと異なった見方を子どもたちにフィードバックしたとき、児童は新たな事象を発見し、問題を解決することに意欲を示すことにつながるのか。本研究では、展示利用者に行動化を促す仕掛けとして「展示」を多面的に試行する。

3. 研究の方法

生命の星・地球博物館の学芸員と小学校、中学校の先生を中心とした研究代表者、研究分担者、連携研究者、研究協力者からなるプロジェクトメンバーを組織し、学校現場での展示手法の検討、実際の学校での展示実践を行った。

4. 研究成果

つぎの学校において、学校ミュージアムの実践が行われた。展示実践の詳細については、2010年3月にまとめた研究報告書「博学連携による小中学校における地域地学資料展示の取組と子どもの変容」(田口編集)に報告した。

(1) 学校ミュージアム実践校

南足柄市立福沢小学校
大井町立上大井小学校
山北町立清水中学校
横浜市立森中学校
秦野市立本町小学校

南足柄市立福沢小学校、大井町立上大井小学校では、児童の世界を広げ、異文化理解を促し、大人との情報発信・情報交換の場として、地域に開かれた環境づくりをねらいとして「学校ミュージアム」を展開した。多様なテーマで展示を行ったが、一例を挙げると、児童が見つけた昆虫や自然情報をとりあげ展示する「みんなのコーナー」、保護者協力による写真展、グッズ展、教員による異文化理解の展示等々である。特に、地学素材にこだわらず内容を広く扱ったことが、理科に限らず他の教科にかかる展示を可能とした。展示場所は、子どもが見やすいことと教員が管理をしやすいという条件から、職員室近くのスペースにガラスケースを用いた展示が中心となった。学校ミュージアムを開設することで、知的好奇心を触発された児童たちが、次なる展示のヒントやきっかけをもたらす

ことが生まれている。展示をつくるのは、教員だけでなく、児童、地域の協力者と様々な人が可能であり、同時にかかわる人たちの活躍の場となりうる。学芸員との連携は、学校ミュージアムの機能をより充実させることにつながった。

山北町立清水中学校では、理科教諭による「理科室だより」発行という形での情報発信が試行された。実物標本の展示スペースの制約等を考慮すると、印刷シートでの展示は手軽にできる情報発信となる。実物展示では、理科教諭が興味を抱いていたアンモナイト化石をテーマとして、理科室での展示実践を行った。学校ミュージアムの開設は、中学校校内はもとより、隣接する小学校から授業の一環として展示見学するという実践につながった。

横浜市立森中学校では、机ひとつから始める「学校ミュージアム」が実践された。つく手1つのスペースに展示できる資料は限られているが、デジタルフォトフレームを活用し情報を付加する展示を行った。デジタルフォトフレームなどを用いた画像展示は、限られた展示空間で手軽に情報発信が可能であり効果が高い。

秦野市立本町小学校では、地域の専門家と学芸員が実物資料を教室に持ち込んでのいわゆる出前授業と、それに併せてのミニミュージアムの実践を行った。実物資料を用いた授業にとどめず、休み時間や放課後等、それらの実物資料を展示へと発展した実践となった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌〕(計3件)

田口公則, 身近な素材で学校ミュージアム, 理科教室, 52(8), 94-95, 2009, 査読無
斎藤有紀雄, 初等理科教育, 43(1), 34-35, 2009, 査読無
一寸木 肇, 初等理科教育, 42(2), 34-35, 2008, 査読無

〔学会発表〕(計2件)

田口公則・大島光春, 学校にミュージアム文化を広げよう 博物館の活動プロセスの共有を取り入れた博学連携, 全国科学博物館協議会第17回研究発表大会(ポスター発表), 2010年2月26日, 仙台市科学館

田口公則・大島光春・一寸木肇・飯島俊幸・斎藤有紀雄・露木和男, 学校ミュージアムの可能性~地域地学資料の蓄積と活用, 日本地学教育学会第63回全国大会, 2009年8月23日, 三重大学

〔その他〕

報告書 田口公則編，博学連携による小中学校における地域地学資料展示の取組と子どもの変容，36pp，2010年3月31日

新聞掲載 「小学校にミニ博物館」神奈川新聞 2009年6月13日掲載

アウトリーチ 秦野市立本町小学校6年生理科授業 2009年10月30日

6. 研究組織

(1) 研究代表者

田口 公則 (TAGUCHI KIMINORI)

神奈川県立生命の星・地球博物館・企画情報部・主任学芸員

研究者番号：70300960

(2) 研究分担者

大島 光春 (OSHIMA MITSUHARU)

神奈川県立生命の星・地球博物館・学芸部・主任学芸員

研究者番号：40260343

(3) 連携研究者

露木 和男 (TSUYUKI KAZUO)

早稲田大学 教育・総合科学学術院・教授

研究者番号：40550364

(4) 研究協力者

一寸木 肇 (CHOKKI HAJIME)

大井町立上大井小学校・校長

研究者番号：なし

飯島 俊幸 (IIJIMA TOSHIYUKI)

前山北町立清水中学校・教諭

研究者番号：なし

斎藤 有紀雄 (SAITO YUKIO)

横浜市立森中学校・校長

研究者番号：なし